

藤本義一

母デアル コトハ難シイ

母と子のさまざまな風景



〔学研の家庭教育シリーズ〕

母デアルコトハ難シイ

—母と子のさまざまな風景—

定 価 850円
著 者 藤本 義一
発行人 黒川 巖
編集人 本郷左智夫
発行所 株式会社 学習研究社
〒145 東京都大田区上池台 4-40-5
振替 東京 8-142930
印刷所 壮光舎印刷株式会社
株式会社金羊社

この本の内容製本に関するお問い合わせは、下記
をお願いします。

文書は、

〒145 東京都大田区上池台 4-40-5

学研・お客さま相談センター

「母デアルコトハ難シイ」係

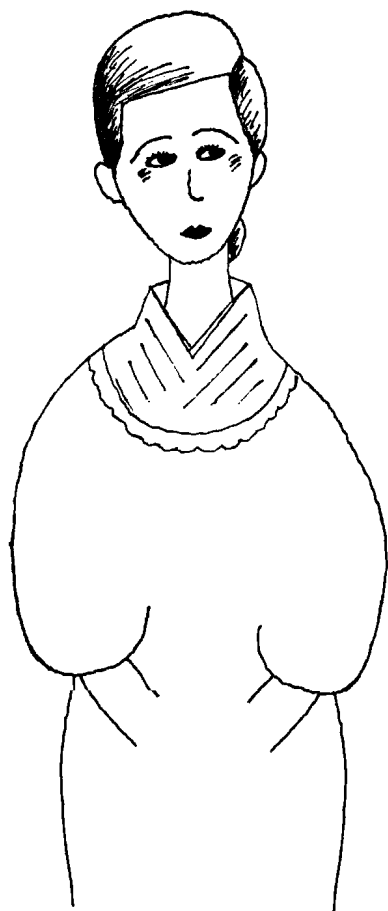
電話は、東京 (03) 720-1111 (大代表)

無断転載、無断複写複製 (コピー) を禁ず

©GIICHI FUGIMOTO 1981 Printed in Japan

0037-166 762-1002

藤本義一
著



母デアルコトハ難シイ

母と子のさまざまな風景

まえがき

私は月に一回か二回、録音機^{デック}を肩にして、近畿を中心にした小学校をまわる。時には中学校に足を向けることもあるが、主に小学校である。私は、彼等の心の中にある宝石を、マイクから掬^{すく}い上げようとする。ひとつは放送の仕事、もうひとつは、私個人の興味からである。

子どもは小さな大人だという言葉がある。

子どもは小さな哲学者だという言葉もある。

私は、子ども一人一人の歓びや悲しみを回転するリールの中におさめながら、子どもたちは、小さな大人であると同時に、小さな哲学者であると感じるが、なによりも、偉大なる詩人だと思う。到底、大人の心では謳^{うた}いきれない純粹な詩を、彼等は謳い上げてくれるのである。そして、この小さな偉大なる詩人たちは、時には面白い言葉をやりとりするものである。

親という漢字を初めて習った時、一人の子どもが言った。

「親というのは、木の上に立って見ている人やなあ」と。

なるほど、親という字を分解して三つに分けると、立、木、見となる。

この言葉をうけたもう一人の子どもが、すかさず言ったのだ。

「そうや。そうやのに、親は時々木から降りて来て、ぼくらは迷惑するわア」と。

子どもの生活、思考、行動に、親が少し干渉しすぎるのではないかというのである。子どもたちは干渉という言葉を知らないけれども、ユニークな発想で漢字を分解して、自己主張をするのである。彼等には、はつきりとした自己主張があるのだ。大人たち、親たちは、それをもすれば見失いがちになる。私は、この偉大なる詩人たちから拾い集めた話をこれから披露していこうと思う。小説ではないので、なるべく形容詞を避け、ストレートな日常の動きの中で母と子をとらえようとした。書く側としての意見も挟み込んで進行させてみたのだが、それもあまり深く切り込もうとしなかったのは、読んで下さる方に、それぞれの意見をもってもらおうとしたからである。

さまざまの場所で、さまざまの母と子に会った。つくづく感じたことは、母ニナルコトハ易シイが、母デアルコトハ難シイということであった。母親を継続するのは大事業であると思う。父親の比ではない。子どもの第一反抗期、第二反抗期は両親共にひとつの波をくぐることになるが、母子の絆が、強くなるか弱くなるかは、この時期に決定されるように実感をもった。父親は生き方を示し、母親は生き方プラス生活を子どもに明確に示さなければいけないのだなあと感じたものだった。

ここで申し添えておきたいことは、私は一人の父親、二人の子どもの父として、四十歳以前の目で見たことを、四十歳を過ぎてから書いたということである。この男の視点を読んで下さる方は、念頭においてもらいたいと思う。私はお母さんたちの意見を聞きたいのは勿論だが、お父さんたちの意見も聞きたい。

もくじ

第一話

夕焼けの詩

7

第二話

青いガラスの目

24

第三話

順教尼さんのこと

42

第四話

首を捜す記

59

第五話

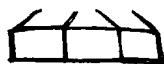
超親馬鹿ママ

77

第六話

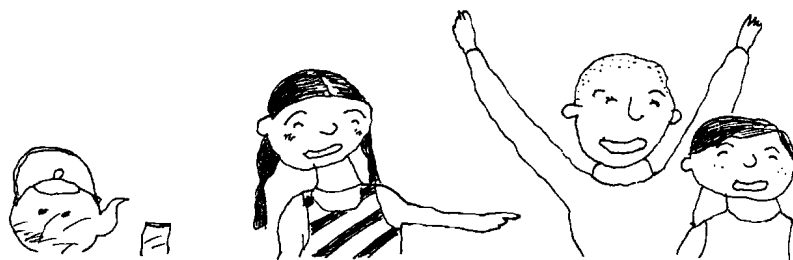
殺人罪の母

95



mq

第七話	子どもを守りきれない母	113
第八話	歩め、アユミ君	131
第九話	裸の代理母	148
第十話	親不孝・親不行	166
第十一話	奇妙な母親	184
第十二話	母さんのパスポート	201
第十三話	手づくり童話	218



小社が昭和五十三年に発行した『満点ママ減点ママ』を改題し、
新しくさし絵を加え読みやすくしたものです。

表紙・本文イラスト／灘本唯人

装丁・レイアウト／内藤正人

夕焼けの詩

第一話



九月の新学期の始まったばかりの朝、大阪市内のN小学校の四年クラスで、夏休みの思い出という発表会があった。

黒板には、

——夏休みの思い出発表会

と書かれていた。

テレビの歌番組のように、黒板に向かって左手に、椅子が三つ並べられ、そこが審査員の席になっていた。

二十九歳の西岡先生が、真ん中に座り、その両側に、男女一人ずつが座り、発表の点数をつけるわけである。

点数は、教室の拍手の大きさと、拍手した人数、そして、拍手していた時間の長さで決定される、と先生は発表会の前に審査基準を発表したのだった。

「どうやった、夏休みは、楽しかったか」

胸板の厚い西岡先生が、スポーツシャツの胸をぐっと突き出して話しかけると、

「ハーイ」

と、四年生たちは答えた。中には、ウォーイと奇声を発した何人かがいた。その奇声の主は、明らかに、私が録音しているのを意識した声である。どこの学校に行っても、外部からのちゃんゆしや闖入者が教室に現れると、三人から五人が、その闖入者に向かって意識的な音を放つものである。このときのウォーイも、そんな子どもたちだった。

「では、一番、思い出にある話を一人ずつやっていこう。人数が多いから、短くやろうや。うまく話にまとめられるかどうかだから、いいな」

「ハロー！」

といった具合に、発表会は始まったのだった。

さまざまな思い出が子どもたちの口から飛び出してきた。

おもに、旅行の話だった。ハワイ、グアム島、アラスカに行ったのが、一人ずついたが、その他は、お母さんの故郷に行ったり、お父さんの故郷に行つて来た思い出が多かった。

都会生まれの都会育ちの彼等に、田舎での何日間いなかは、自然環境との融け合いがとても楽しかったらしく、魚釣りや蟬せみの誕生などがとくにもの珍しいようだった。

なかには、いくつか傑作があった。

「ぼく、びっくりしたんや。女の人が立ち小便してたんや。おばあちゃんやったけどもな、こういうふうにして……」

彼は、足をひろげて立ち、前^{まえかたが}躡みの姿勢をとり、絶大な拍手を得たものの、女生徒から反論をくらって、減点されてしまった。

「真相やのになあ、真相やのになあ」

彼は残念がつて、こんな言葉を繰り返していた。どうやら、四年生の彼には「事実」を、「真相」という傾向があるらしいとわかった。

「うちは、妹とお母ちゃんとお父ちゃんとで高野山に行きました。高野山は、とても朝晩が寒かったのですが、はじめての朝、六時頃に、ブッポウソウの鳴き声が聞こえてきましたので、妹のヨッちゃんを起こして、まだ寝ているお父ちゃんとお母ちゃんには内緒で、声のするほうに足音を忍ばせて行きました。背の高い杉の木が何十本、何百本と立っていて、朝霧^{あさぎり}が煙^{けむり}みたいで……」
この女の子は、なかなか表現が豊かで、淡々とした話しぶりだが、聞いている連中に固唾^{かたず}を吞^のませたものだった。教室中がしーんとなった。

「ここや！ と妹がいうたので、杉の木の上のほうを見ると、拡声器が針金で結びつけられてたんです」

わっと子どもたちの拍手が湧いたのだった。

つまり、宿坊か管理事務所かで、エンドレスの仏法僧の声が回転していて、彼女は騙^{だま}されたというのである。

「なーんや」

という声や舌打ちや、うまく話に乗せられたという嘆声しげらが、暫く教室の中に渦巻うずまいていた。

中には、私のほうに向かつて、指でOKサインをつくり、グーと桂三枝かつちんしの真似をするのもいた。

子どもが流行語を素早く自分たちのものにするのは、大人よりも大体六か月は早いのだ。三枝の真似をした男の子は、私に向かつて、今の話が今日の白眉はくびの一篇であるといっているのだ。

確かに語り口もよかつたし、結末は現代の状況を描いてもいて、面白かつた。

彼女が今日の一番かと、私自身も思っていた目の前に、小柄な丸刈りの男の子が飛び出して来た。
上衣うわぎは衿えりの大きな半袖はんそでで肩のところに繕はいが見えたが、洗濯せんたくしたてであつた。

彼は、上気した顔で、丸い目をきよろきよろさせ、何回も丸刈り頭を撫なでるのだった。
すると、困惑している彼に向かつて、あっち、こっちから、

「トオル！ トオル！ トオル！」

の連呼が起こつた。

私は、この掛け声が、彼の人気度を示すものか、それとも、揶揄からかいかわからなかつた。

トオル！ の掛け声は、

「サッサ、サッサ」

と、変化した。

どこかで耳にした言葉だと考えると、その掛け声はテレビの洗剤のコマーシャルで、CMをやっている落語家の林家小染に、トオルはよく似ているのだった。

「え……」

トオルは、やや凸凹の頭を撫でながら、顔を真っ赤にして、唇をとがらせて、喋りはじめたのだ。
った。

「えー、ぼくは、夏休み中、どこにも行ってませんねん」

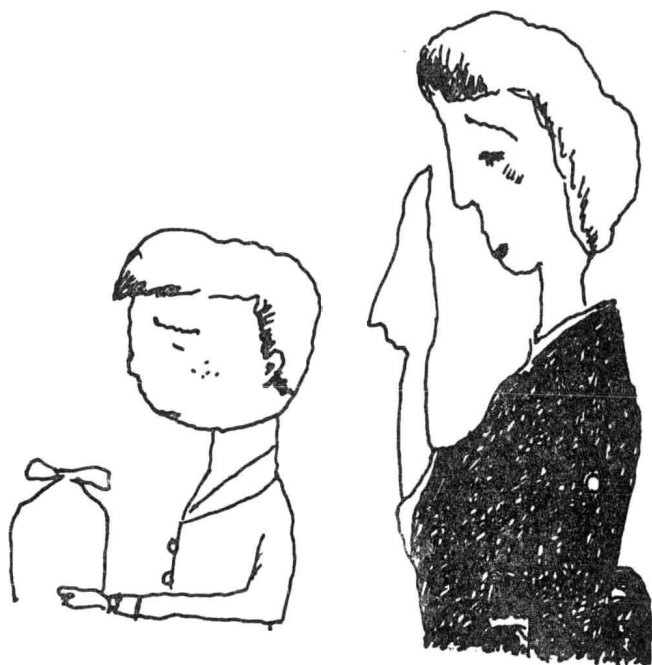
二

坂口徹の父は、徹が三年になった春先に死亡した。事故死である。轢き遁げに遭った。父親は三十九歳だった。勤めていたプラスチックの町工場が倒産して、父は失業保険を得ながら、次の職場を探していたのだが、これといった技術があるわけでもなく、不況の兆しの見えはじめた昭和四十九年だから、就職するのが難しかった。

事故は、雨の日の午後六時過ぎに、夕風橋近くの国道で起こったのだ。中型のトラックにはねられ、傘は真ん中から折れ、父親は頭蓋骨を骨折して即死だった。

失業保険証から被害者の住所、氏名はすぐにわかり、事故が発生してから一時間後に、徹と母親は報せをうけた。

第一話 夕焼けの詩



母は、夕食のカレーを煮ていて、徹は、算数の宿題をしていた。

玄関口で、低い男の人の声が出ているなあと思っていると、母が厳しい面持ちで、奥の間にはいつてきた。

「徹、すぐに服を着替えなさい」

と言いながら、母は割烹着かつぽうぎを脱いだ。いつもなら簡単に脱げるはずの割烹着が容易に脱げない母の仕草に、徹は異常なことが起こったと子ども心に敏感に受けとめた。

「お母ちゃんの指がふるえてる」

と感じた徹は、なにも聞かずに着替え、レインコートを着て、玄関口にいる雨にずぶ濡れになった見知らぬ男の人を見上げた。

男の人は、複雑な笑いを口許くちもとにうかべて、徹の頭を撫でるようにして、

「大丈夫、大丈夫」

と言ったのだった。

徹は、その短い大人の言葉に、お父さんになにか異変が起こったのだと思い、転がるように風呂敷包しきみを胸にかかえて飛び出して来た母と一緒に、男の人が運転してきた黒色の車に乗り込んだ。

車中、母は、風呂敷包みを胸に抱いたまま、一言もいかなかった。

徹は、乱暴に結ばれた風呂敷の結び目に、母の動顔どうてん、狼狽ろうばいを察知していた。ものごとろついてか

ら、徹は、これほど取り乱した母を見るのは、初めてだった。いつも、きちんとしているのが母の身上なのに、この乱れた結び目は一体どうしたことなのかと考え、風呂敷の中からのぞいている父のタオル地の寝巻きの端を見て、これからの行き先が病院だなと考えた。

子どもの感覚は、主に視覚と聴覚であり、それも大人よりも敏感に受けとるものである。十倍、二十倍もの敏感さである。

徹は、タオル地の寝巻きを見た途端、少し安心した。

「お父ちゃんは怪我したんや。死んでえへんのや」と、思ったのだ。

寝巻きを着ることが出来るというのは、生きている証拠だと思った。そして、急に報せがあったというのは、きつと交通事故に違いないと考えた。

が、本当は、父は即死だったのだ。迎えに来た病院関係の人は、即死だというと家族が動揺してしまうといけないので、「重傷」というふうに言ったわけだ。

母も徹も、父の生きていることだけを頼りにして、病院に駆けつけたが、すでに父は、死後一時間半を経過していたのだった。

徹の見た父は、顔も体も、幅の太い縷帯で、ぐるぐる巻きになっていて、いつか父が会社の慰安旅行で四国に行った際、お土産に買って来てくれた姫達磨とそっくりだった。